

人間と動物はどこが違うか

稲垣久和

最近、子供の自殺が増えています。子供の教育は、大人のものの考え方如何で決まります。従って子供が生きる力をなくしてしまうのは、大人自身が正しく生きる意味をつかんでいないことの反映です。

私は生物物理を研究しています。その方面から、まず生物と無生物（≡物質）との本質的な違いを考えてみましょう。生命体を科学的にどう定義するのかという問題です。その一つの方法は熱力学第二法則（エントロピー増大の法則）を拡張することです。もとの法則は

$$dS = dS_1 - dS_2 < 0 \quad (A)$$

と書けます。 dS を“全ネグントロピー”、 dS_1 を“ネグントロ

ピー消費”と呼びます。ネグントロピーを「より高い秩序」という概念で置き換えても結構です。 dS_2 が負ということを書葉で表わすと、物質の世界では、放っておくと、どんな「秩序」の低い状態へ落ちてゆくということです。例えば新品の三輪車を外に一年以上放っておくと、さびてポロボロの鉄くずになってしまうわけですね。これは熱力学第二法則のあらわれです。次に自然界の生物をも含めるために (A) を次のように拡張します。

$$dS = dS_1 + dS_2 \quad (B)$$

ここで dS_2 を “ネグントロピー輸送” と呼びます。 dS_2 は周囲（環境）からネグントロピー、即ち「より高い秩序」をどんどんとり入れる項です。例えば外に植物の種を播いて、一年以上放っておくと成長して見事な花が咲きます。これは dS_2 という項を通して日光や水や酸素等をどんどん取り入れるからです。つまり dS_2 があることによって、生物が無生物と区別されるのです。そしてこれが、熱力学的に “生きている” という定義になります。

さて以上のことを頭に入れながら、次に (A) (B) を使って動物と人間は本質的にどこが違うかを考えてみましょう。今度は dS_2 を “自然的なもの” と呼びます。これは、生

れた時から自然に身につくものという事です。動物学者が個や集団の行動を研究し、それをそのまま人間に応用するのは「自然的なもの」のわく内で考えているからです。人間が他の動物と異なることの一つは、「人間に生きる意味と価値を与えるものは何か」という形而上学的な問いを自ら問えることです。従って心理学者も、個人と他人又はそれらのつづっている社会というわく内で、その関係のみを研究する限り、たとい人間の深層心理という言葉を使ってもやはり「自然的」です。何故なら先の大きな問いに、はっきりした答えを与えなくては、本質的に人間と動物を区別できないからです。そこで私達は「自然的」なものだけでは不十分で、*psycho*に対応するものを必要とします。この *psycho* を「超自然的なもの」又は「人格的なもの」と呼ぶことにします。これこそが、人間と他の動物を区別し、人間にユニークな価値即ち人間らしい人間性を付与するのです。人間は超自然的なものを受け入れる場所を持ち、それを理解できます。では一体、「超自然的なもの」とは何でしょうか。それは人間より高い秩序からとり入れるべきはずのものです。

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち神のかたちに創造し、男と女とに創造された」(創世紀一・二七) 聖書

は人格的な神が存在し、万物の創造主であると教えています。万物とはすべて即ち、無生物・生物・人間を含み、これらは神の被造物であるが故に、意味を持ちます。そして人間は、その創造主のかたちに造られていると、記されていますから、一人一人の人間が動物と違って全くユニークな意味と価値を与えられた被造物なのです。愛と尊敬をもった人間の人間らしさ、創造性をも含んだ人格的なものの基礎はここにあります。私が超自然的なものと呼んでいますのは、人格的な創造主との正しい関係のことです。これが先の形而上学的な問い「人間に生きる意味と価値を与えるものは何か」への答えです。

現代は、人格的なものがはっきり自覚されずに、従って人間が本来の人間性を持ったものとして扱われることが余りにも少ない時代と言えないでしょうか。人格的なものの基礎を子供達に伝えてゆき、又引き出すことが教育の目的ではないでしょうか。

「きょうは生えていてあすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなた方に、それ以上よくしてくださいさらにはずがあるか」(マタイ六・二六)

(国際基督教大学物理学教室)